

2020年8月2日
宮崎中部教会平和聖日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 11：1～10

エフェソの信徒への手紙 6：10～20

「神の武具」

<平和の祈り>

日本基督教団では、ヒロシマに原爆が落とされた8月6日の前の主日、つまり8月の一週目の主日を「平和聖日」と定め、主に平和を求めて祈る日としています。

戦後75年となり、戦争を体験した方は少なくなっていますが、それを忘れないように、今も体験を分かち合っておられる方がいます。しかし、思い出すことも辛く、語る事が出来ない方もおられます。当然だと思います。そんな戦争の悲惨さ、残酷さを恐ろしいと感じます。それは、人間が行なったことです。だれもが良くないことだと知っています。してはならないことだと分かっています。でも、今も世界で戦争が絶えることはありません。

なぜ戦争は起こるのでしょうか。なぜ人は非人道的なことが出来るのでしょうか。なぜ人は争いを止めないのでしょうか。なぜ自分の利益のために、他者を傷つけて良いと思うのでしょうか。なぜわたしたちは人を愛することが出来ないのでしょうか。

そこには、自己中心に歩む根本的な人間の罪と、そこに働きかけて、神さまの御心から人間を引き離そうとする悪魔の力が、確かにあるように思います。

悪魔と表現されるのは、人を神から引き離すあらゆる力のことです。その力が、時にわたしたちに働きかけ、罪へと誘うことを、わたしたちは否定することが出来ません。わたしたちの内に潜む欲望に語りかける。自己中心的な思いを肯定する。神などいないと思わせる。人との関係を分断させる。わたしたちの罪を引き出し、神から引き離そうとする力が、この世の中には確かにあるのです。

そんなものはない、悪魔などいないと、見て見ぬふりをするのは危険です。それは「戦争」という大きな出来事だけでなく、わたしたちのとても身近な生活の中にも潜んでいるからです。自分の利益を優先し、相手を重んじず、苦しむ人を見捨て、敵対する人を決して赦さない。そんな罪へと誘う、あらゆる誘惑、あらゆる悪は、いつも近く、日々の中にあるのです。

だから悪魔の働きは、大きな争い事や、激しい葛藤のような、分かりやすいものとは限りません。優しい顔の裏に、日常の出来事の陰に、ふとした心の思いの中に、悪魔は入り込みます。そして、そこから、人は罪を犯すのです。神さまの御心から離れるのです。

<信仰の戦い>

今日の聖書の12節を見てみますと、「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではない」とあります。わたしたちの戦いは、血肉、つまり人間相手ではないのです。何が相手かということ、「支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊」が相手であると言いま

す。この全世界の、神に敵対するあらゆる力が、わたしたちを神から引き離そうとする全ての悪の力が、わたしたちの戦う相手だということです。

でも、これは宇宙大戦争のような戦いではありません。この「戦い」という言葉は、レスリングや組み打ちという意味です。つまり、わたしたち一人一人が、取っ組み合って戦わなければならないのです。毎日の生活の中で犯してしまう罪。身近な人間関係における愛の無さ。人を分け隔てしてしまうこと。そういうところで、悪との真剣な取っ組み合いがある、ということなのです。

しかし、まず覚えておきたいのは、このエフェソへの信徒への手紙は、イエスさまの十字架と復活の救いに与った、教会の信徒に向けて語られているということです。

つまり、すでにイエスさまが罪から解放して下さり、イエスさまが悪魔に勝利して下さり、イエスさまが死に打ち勝って下さっている。このイエスさまの救いを信じ、イエスさまの勝利に与り、イエスさまに一つに結ばれている、キリスト者たちの戦いなのです。

ですからこれは、まさにわたしたちの戦いです。でも、わたしたちは「戦い」という言葉に抵抗があるのではないのでしょうか。信仰生活は「平和」であって、「戦い」ではないのではないか。イエスさまの勝利に与っているのなら、救いを信じ、信仰を与えられているのなら、その信仰生活は穏やかで、平和で、優しさに満ちた素晴らしいもののはずではないか。そう思われるかも知れません。

確かに、わたしたちはイエスさまの救いによって、神さまとの間に「平和」を得ました。それは、わたしという存在を根本的に支える、まことの平和であり、安らぎであり、間違いなく素晴らしいものです。この神さまの平和さえあれば、わたしたちは確かに安心して生きることが出来ます。

しかし、この神さまの平和に生きることは、この地上でのわたしの人生が、穏やかで波風立たないものになる、争いがなくなる、自分の願い通りになる、生活が安定する、病気がなくなる、嫌いな人がいなくなる、ということではないのです。

わたしたちは、イエスさまの救いに与ったのなら、自分の願う人生ではなく、神さまが願われる人生を歩むようになります。わたしたちは、イエスさまの、ご自分を犠牲にして下さるほどの愛によって生かされたのですから、わたしたちもまた、このイエスさまの愛に従って、この地上の生活を歩むことを望まれています。

それは、自分の思い通りになる人生ではなくて、自分の願いを叶える人生ではなくて、神さまが求めておられることに従う人生、神さまの御心を実現する人生です。神さまの御心とは、すべての人が神さまの許に立ち帰り、イエスさまによって罪を赦していただき、神さまとの交わりに生きる者となること。すべての者が主にあって一つとなり、神さまを礼拝する者となることです。すべての者が神さまを愛し、また隣人を愛する者となることです。

わたしたちの人生は、この神さまのご計画の完成に向かって、神さまと共に歩いていく人生です。わたしたちは神さまと共に歩むのですから、このお方に敵対する力と、わたしたち

もまた、必然的に戦っていくことになるのです。

でも、わたしたちにとって、その戦いはとても困難です。わたしはすでに、神さまの愛を受けているのに、すでに、神さまのものとされ、神の子と呼ばれているのに、中々自分自身を捨てきれず、自分のことばかりを考え、自分のように人を愛することが出来ないからです。

ここに悪魔が働きかけます。どうせあなたにそんなことは出来ない。あなたは悪くない、相手が悪い。そんなことを求める神が悪い。あなたが我慢したり、損をすることはない。そこまで出来ないし、する必要もない。・・・そんな、神さまの御心から引き離す悪魔の誘惑を聞き、わたしたちは色々言い訳を始め、愛はどんどん冷めていきます。

ですから、わたしたちは信仰の戦いをしなければなりません。神さまと共に生きる者として、神さまの平和に与っている者として、日々罪と、悪と、取っ組み合いをして戦うのです。

<神の武具>

しかし、どうやって戦えば良いのでしょうか。今日の聖書箇所は、わたしたちは自分の力では、全く戦えないのだ、ということをはっきりと教えています。

10 節に、「最後に言う。主に依り頼み、その偉大な力によって強くなりなさい」とあります。主に依り頼まなければ、神さまの偉大な力によるのでなければ、わたしたちはまったく弱いままであり、どこにも強さなどないのだ、ということです。

そして 11 節には、「悪魔の策略に対抗して立つことができるように、神の武具を身に着きなさい」とあります。神の武具として、真理を帯とし、正義を胸当てとし、平和の福音を告げる準備を履物とし、信仰を盾として取り、救いを兜とし、神の言葉を霊の剣として取りなさい、と書かれています。帯、胸当て、履物、盾、兜、剣の六つの武具は、当時のローマ兵の完全武装だと言われています。神さまからの武具によって、完全武装する。

つまりこれは、わたしたち自身は、身を守るものも、攻撃するものも、戦うためのものも、何にも持っていない、ということなのです。すべて神さまから与えられるもので身を固めなければ、わたしたちは悪魔にまったく対抗できないのです。わたしたちは、この自分の弱さを、戦う力が自分にはないことを、よく弁える必要があります。

しかし、この神の武具を身に着けるならば。真理と、正義と、平和の福音を告げる準備と、信仰と、救いと、神の言葉。これがあるならば、わたしたちは、邪悪な日にもよく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかりと立つことが出来るのだ、と言われています。

これはつまり、神の力によって戦うということです。全面的に神さまに頼るということです。わたしと共にいて下さる神さまに、わたしに敵対する悪魔と戦っていただく、ということです。わたしたちの日々にあって、わたしたちの生活にあって、共にいて下さる神の力が、わたしを悪魔に打ち勝たせて下さる、わたしたちに勝利を与えて下さる、ということです。

しかもこの戦いは、イエスさまの十字架と復活によって既に勝利されている戦いであり、

終わりの日には、悪も、罪も、死も、すべて完全に滅ぼされる、と約束されている戦いです。

よく見れば神の武具は、霊の剣、つまり神の言葉の他は、身を守るものばかりです。これらの神の武具は、すでにイエスさまが戦って下さり、与えられている勝利に、わたしたちが終わりの日まで固く立ち続けるため。この神から与えられた勝利の約束を、疑ったり、自分から手放したり、悪魔に唆されて捨てることのないように、しっかりと身を固めて守り、イエスさまの恵みに留まり続けるためのものなのです。そのために神から与えられた武具を身に着け、これに依り頼み、この神の力によって、立つのです。

わたしたちの信仰は、わたしの信じる強さとか、信じ方とか、心意気によって、強くなったり弱くなったりするものではありません。「わたしは信仰が弱いです」という言い方を聞くことができますが、それは自分の力によって、自分で信仰を支えなければならないと思っているのです。でもわたしたちは、自分の弱さを小さく見積もってはいけません。わたしたちは、本当に罪深く、弱い。だから信仰は、神さまに与えられるものであり、わたしの確かさではなく、神さまの確かさに支えられ、神さまによって強められるものなのです。

わたしたちは、全面的に神さまの力に頼ることによってのみ、悪と戦い、信仰に固く立ち、神さまの愛に生きる者となる事が出来るのです。

<主にあって>

ですから、10 節にある「主に依り頼み」という言葉は、「主に在って」「主の中で」という言葉です。わたしたちは神さまの中にあってこそ、神さまの力によって強くなり、戦う事が出来るのです。ですから、神さまから離れてはいけません。主の中にいるから、主がその力を与え、戦えるようにして下さい。

この主から離れないために、いつも神さまとの交わりの中にいるために、わたしたちがなすべきことは、神の言葉を聞き、祈ることです。

18 節には「どのような時にも、霊に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい」とあります。

わたしたちは、聖霊によって祈ることで、イエスさまの救いに、神さまの力に与ります。祈ることによって、主の中にあって、神さまとの交わりに生き、神の武具を身に着け、これを用い、悪と戦う事が出来るのです。

さらには、「すべての聖なる者たちのために祈る」ことです。わたしたちは、一人で悪魔と対峙しているわけではありません。共にお一人のイエスさまに救われた、一つの体である教会の兄弟姉妹が共にいます。皆が主の中に在って、一つとなって祈り合い、支え合うのです。

わたしたちは、教会のために、兄弟姉妹の戦いのために、祈らなければなりません。これは同時に、わたしが祈れなくなった時に、代わりに執り成し祈ってくれている者がいる、ということでもあります。教会の中で、共に祈り、共に支え、共に歩いていくのです。

この祈りの中で、わたしたちは主の中にあって、神さまの武具をしっかりと身に着け、そ

れぞれに与えられた信仰の戦いを、日々の悪魔との取っ組み合いを、神の力によって戦っていくことが出来ます。世の力に、悪魔の力に対抗して、罪から離れ、神さまの御心を行なっていくことが出来るのです。

祈り、祈られ、一人一人が与えられた信仰の日々を歩んでいきます。そこで、わたしたちが神の力によって悪魔と戦い、神の愛に生きようとする時。主にあって、一人の隣人を愛そうとし、一人の隣人を赦そうとする時。そこにこそ、神さまのまことの平和が実現し、神さまの愛が広がっていき、わたしたちが共に主の中にあって、共に生きることが出来る世界が、築かれていくのではないのでしょうか。

【お祈り】

天の父なる神さま

平和聖日の今日、わたしたちは先の戦争を覚え、その苦しみ、悲しみ、悲惨さを覚えます。そのような悲惨さを引き起こす罪が、あなたの御心に逆らう罪が、わたしたちの内にもあることを告白し、悔い改めます。

しかしイエスさまが、十字架と復活の恵みによって、罪の赦しを得させて下さいましたから、イエスさまの恵みにあって、あなたの力によって、わたしたちが悪魔の策略に対抗し、信仰の戦いをなすことが出来ますように。与えられた日々の中で、あなたの御心に従って、あなたを愛し、隣人を愛して、歩むことが出来るようにして下さい。

また、共に兄弟姉妹が、聖霊によって共に祈り合いつつ、一つとなって歩んでいくことが出来るようにして下さい。

そして、一人でも多くの者が、イエスさまの十字架と復活を知り、神さまの愛を知り、神さまの中で生きる者となることが出来ますように。

そして、この世のすべてが、あなたのまことの平和によって支配されますように。

イエスさまの御名によって祈ります。アーメン